



6175

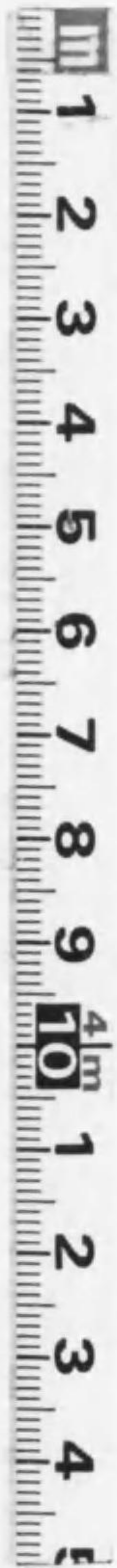


百傑作
種作

集一第

一志分礼

完



始



講談速記第一集發行

筆と舌と孰が利きと問ふは、猶月と花と何が
美きと争ふが如く、孰を何とも定め難れ共、
人情の眞を細に寫して、人の心を深く動すは、
舌の或は筆に優るの感なきにあらず、今度講
談速記といふを編輯し、毎月一冊を發行す、
其は名ある講談家の演述を、名ある速記者を
して筆記せしめ舌の妙を筆に寫し、双方の美
を一つに集め、月と花とを併せ見るの感あら
しめんとす、即ち第一集に掲ぐるは松月堂
吞士師の正直新助、紙数は二百頁迄の大形美
本、代價は僅々九錢物は飽迄精價は十分廉

正直新助

●菊版類美本紙數百七十餘頁●全一冊
讀切●一冊正價九錢●十冊前金八十五
錢●廿冊前金壹圓六十錢●府外郵税一
冊ニ付四錢●郵券代用一割増

發行所

大阪心齋橋北詰 駸々堂

探偵第一集薄皮美人完

近來陸續出版する探偵小説、多くは原料を佛米
に採り、僅に地名人名を變史しのみ、其作者の
意匠に成れるものは、晨の星の極めて少なし、
此薄皮美人は左にあらず、浮世合まよふ大人が
、十ヶ月の辛苦經營にて、全く其腦裏より案出
せる、脚色さへ文章も日本美人、其名も目出度
き三千代嬢も、如何なる宿世の業因にや、善ら
ぬ者の手に罹り、薄皮美人と諱名さへ、聞くも
憐れな不幸薄命、探偵ならぬ探訪の、萩野が露
の情誼にて、被りし汚名と薄皮を、共に綺麗に
清められ、舊の美人に立歸り、見れども飽かぬ
奇思妙想、縁眼紅毛婦人に日本の、衣裳を着せ
た機猛衣冠、容貌粧飾不合ぬ品物と、一樣にさ
れては作者は勿論、駸々堂も共に迷惑に存す

自序

れ菊貧家の娘なれど花の顔月も羞づべき粧ひ親の無慈
悲を苦に病んで甲斐なき月日ふる井戸へ身を捨てに行
く心のあはれき母が無惨の切諫は血しほも凍る雪の瀬
戸イデ身を殺す一段が近ごろ流行の露物語り誠に涙の
一時雨とや言はまし

作者 霞 亭



三 (れ ぐ 一)

影もせず、瓦檜皮に苔蒸して野と成りし里の遠きを見ず
 邊りに榮ふ、白日すら淋しき荒原なるを、秋の夕暮れ人
 むりと詠まれば、白く空を凌ぐ松ケ技獨り高く、古き軒端の
 夢の何れぞ、咲ける女郎花の手枕寒し、曾ての月に風情
 臺高關の跡、何れぞ、萩の花、摺り錦を布く、金殿玉宇の
 うづら鳴き、と、垣根の荒れ果てしを見る、櫻
 の誰の住居ありけん廣さは一町四面なるべし、繁き葎に
 見渡す限り、つり行きて、秋の尾花の袖に残る、ひかし

露 秋の暮れ

東都 霞亭主人稿

一 志ぐれ

(一) ま ぐ (れ)

るも哀れあけり、花咲く滋賀の故郷の知らせ、雉子暗
 く長柄の宮の知らせ、荒れ果てし宿の景色程心細く見
 る、これ等なかく、言ふにも足らぬ、茂林を出る鐘の響
 き、露お枯る、虫の聲、見るもの聞くもの一として何れ
 消魂の種あらぬ、なけね、取分けて這許に哀れを殘す
 もの、一ひらす、掻き分けて見れば、古井お恨みの底
 ぞ深けれ、井垣も巳に朽果て、今何とて寂を圍むもの
 すらなし、世に藤原の美るのまし水あらねばや、むかし
 のこゝろ汲ひ人もあく、露吹く風のみ訪はれける
 早や暮れ果て、日影の月に代りけり、雨になる空との見
 えねど、雲の羽立てに色瘦せて誰がならはしの涙身に染
 む、見れば其所の古井の彼方、悄然と立つ美人ありけり

(一) ま ぐ (れ)

年、紀の十六餘り十七にも成るべからん、身に垢染み
 し、養老頼朝の單衣を纏ふて、双子織の半纏殊勝に着下す
 綿糸ひたるやうなれど、夜目あれば色合も定かならぬ、木
 其の扮打こそ如右さしく見ゆるあれ、天然の容色月
 も閉ぢ花も差づる程の有様なり、場所の廣く時の凄し、
 人の氣色塵程もなき此の荒邸お、如右尤物の立ち現る
 天降りましく、狐狸の仕術あらばイザ知らぬ、誰が目にも天女の
 れ、顔の瓜核にして、色蒼けれ眼の二重險にして愛嬌多
 し、長の人並越ねて高きお品格も然のみ、卑しからぬ、無
 房く、とせし縁の髪を櫛巻とやらんいへるに束縛て、無

造作古鏡一ツ狭む、物にたとへて言へば古寺の櫻の花
見るやうなり、淋しきにつけて一段の趣き加はるも可し
、ホッと吐息して袖を涙に噛み占めながら
「眞個に私位の不仕合せあるのありやアしさいよ、お
父さんやお母さんが成さぬ間といふぢやアあし、誰一
人義理ある人の交って居るといふんぢやアないけれど
、夫れで居て、此んなに苦勞をしなくつちやア成らな
い、是といふも前世の因縁とやら知らん、同胞の多
し生計の貧し、其上お父さんがお酒を飲つて何だの
彼んだのと荒ッばくなさる、それに亦たお母アさんが
那んぢだから、酔拂ッて居らッしやるのなら、酔拂ッ
て居らッしやるやうに、介抱をしてお上げなされば宜
いのに、直ぐ角芽立て喧嘩を爲さるんだものぢ、近所

隣の手前へだッて如何な心配だが知れやしない、外
の同胞と言たところがまだ一向に頑世ないものばかり
だから、間へ這入ッて氣を揉むもの眞個に私の外あ
りやアしさい、何方を和めやうにも親と親との争論で
見りやア片手落の挨拶も出来ぬ、お母アさんさへ最
少し物が分ッてお出でなさりやア、何とでも言て仲裁
へ這入れるやうなもの、些少だッて堪えちやア下さ
いませんし、物の言ひやうが悪いと云ちやア擲ち、お
父さんに加勢したと言ッちやアお擲ちあさる、そんな
らと言てお母アさんの方へ加勢すりやア、お父さんの
方が御立腹なさいますから、何方の方を如何しやうに
もテンデ手を出すことが出来やアしさい、是れが他人
の事ぢやアなし、骨肉の親よ擲たれたからッて、何に

も不足を言ふ事にかいんだけれど、何ば何だッて餘り
も無い目にね遭えせなさんだものチ、染みト世の中
が嫌ひあつちまつた、多衆の小供の世話から、毎日の
炊事まで皆私の手一ツに引受けて働いて居るのも、
一ツに親への孝行と思へばお父さんとお母さんとの情間
事言た覺はな、若しお父さんとお母さんとの情間
さへ宜くして下さいますから、此のうへ如何な憂目を
見たからッて厭アしなけれど、毎日夜晩アノ通りの
始末、仕舞ひのハテに斬るの殺すのツて大騒ぎを爲
さるかと思やア、何をするにも張合がなくなッて仕舞
ふよ、嫌だ、眞個に生て居る空のありやアしから、
言ひかけて空高く打ち上げば、涙の星を宿して寒し、
けて散りて憂にみだる、

「事そ這許で死んで仕舞った方が宜い、私が死んだらお
父さんの氣も折れるだらう、何方に目にお遭はせさ
さんの氣も折れるだらう、何方に目にお遭はせさ
るからッて、私だッて骨肉の娘だもの、親の事を苦
に病んで死んだのか知らんと思ッて下さりやア、些少
やそつとは可哀想だと思ッて下さるだらう、ア、爾
うだ、到底望みのない浮世の事、此上難義を見るより
の死んだ方が増しだらうよ、
恨ちつ、身をさしのべて、恐るく井戸の裡面透し見
れば、月の尾花の袖に遮られて、影の井筒の荒れに迷ふ
幾尋深き底暗く、秋みちく、陰氣冷かなり
「死んで仕舞やア自分丈けの苦勞の免れるかも知れ
けれど、後に残った勢やヤ、茂さんが定めて難義をする

だらう、餘所外の小供衆のお母アさんが優しくって居
 らッまやるから、何事もお母アさんを力あして居るけ
 れど、我家の小供ばかりの親よりか私の方を懸しがッ
 て居る、御飯時分だからって、皆な私が用意をして置
 て遣るし、寐る時だッて起る時だッて、姉や姉やと取
 絶ッて頼みにして居て呉れるから、今私が死んぢまッ
 ちやア暗の夜に燈火を失ッたやうあもので、さぞ苦勞
 をする事だらう、夫れや是れやを考えッやア、自分ば
 かり宜いからッて、今更死された義理でもないぢへ、
 此の乙女名をお菊といふ、身に置く露の霜に凍りて烟れ
 ば、操のいろも置きまよふて、そッるに嘆きの數のみ勝
 る、

「死んだ後の事やなんか思ッて見ると、何んどあく生
 命

が惜しくなッて、こんな娑婆でも思ひ切ることが出来
 なくある、
 身みの染しむ風かぜを袖そでに圍かこふて、悄然せつぜんと夢ゆめのやうに立たてば、三
 日の月影つきかげ最いと哀あはれあり、柳やなぎの枝えだに眉まゆを分わかちて、枯野かよの果は
 てにかつゝ懸かる、
 「死しふと思おもッて覺かく悟ごのしたやうなもの、色いろく考かんえ
 て見みれば何なにんぞなく残り惜おしくッて死しぬことも出来でや
 アしさい、今いまごろの勢せいやヤ茂しげさんがさぞ私わたしを尋たずねて居
 るだらうなア、お八重やえもお時ときも那あのの淡たん暗あんい行い燈でんの影かげで
 定さだめて泣ないて居いるだらう、是これを思おもやア私わたしの身みの假かへ
 八裂やちにあッても關かまやアしないから、同胞どうぱうの苦く勞らうが扶たすけ
 て遣やりたくある、是これどてお父ちちさんやお母ははさんの心こころ一
 ツで、頑世がんぜもない小供こどもふまで難義なんぎを掛かけるのかと思おもや

此の邊り亦た時雨けり、片袖目皮におし當て、引返す、
 何所の寺に杵く鐘の音ぞ、我どもに哀れを送りて遠く
 ひく重へまがりて、路次機回左へ隔つ、芝區西之久
 新道一重右へまがりて、路次機回左へ隔つ、芝區西之久
 保柴井町何十番地田中正胤といふ、立派な標札軒下に
 掲げ出したれど、見る影もなき裏屋住居、半ば朽ち果て
 し床板に到るところ斜めに傾きて、歩に堪ゆべく思れぬ
 ど、流石柱梁のみ、残りて今も猶臺石を失はぬぞ、なか
 く、哀れあけり、板葺の屋根の近頃の大雨に傷みて
 名残り少なく吹き散りつ、洩れを補ふ蛇の目の傘のあ
 れど、是れすら瘦せて骨のみあらはなり、檐庇の瓦にて
 聳きたればにや、雨風ふも太く破れ老、苔の色が



利根河

上^{うへ}に 蔓^{はな}りて 昨^{きの}宵^よの 露^{つゆ}のみ 茂^{しげ}く 残^{のこ}せど、こゝかしこ 破^{やぶ}れ 損^たえ
 じて 猫^{ねこ}の 妻^{つま}の 襖^{ふすま}にも 足^あらず、 壁^{かべ}といふも 名^なばかりにて 上^{うへ}
 塗^{ぬり}の 聖^{ひがし}の 影^{かげ}だも 見^みぬき、 あはれ 穢^{けが}ろしき 壁^{かべ}下^{した}地^ぢのみ 見^みゆ
 れど、 今^{いま}の 早^{はや}や 顔^{かほ}れ 傾^{かた}きて 豆^{まめ}の せど き 燈^{あかり}火^ひを 洩^あらすも 憂^{うれ}
 しや、 戸^とに 換^かへて 立^たて 掛^かけし 狹^{せま}筵^{むしろ}ばかりの、 昨^{きの}日^ひ今日^{けふ}の
 新^{あらた}調^{しらべ}あるべし、 編^あみ 目^め新^{あらた}しく 見^みらるれど、 暮^くれ 行^ゆく 秋^{あき}の 風^{かぜ}
 の 劍^{つるぎ}支^さふべしと 欲^ほにも 見^みられぬ、 備^ひ後^ご尾^び之^の道^{みち}といふ十
 年^{とし}前^{まへ}の 名^なの 残^{のこ}せど、 疊^{たた}の 前^{まへ}後^ごの 塵^{ちり}り 切^きれて 塵^{ちり}芥^{かい}堆^{たい}く、 雨^{あめ}
 車^{くるま}の 斑^{まだら}に 痕^{あと}を と い め て、 檐^{えん}の 洩^ある 星^{ほし}の 影^{かげ}宿^{とど}すも 淋^{しみ}しかりけ
 り、 骨^{ほね}折^おれ 紙^{かみ}破^{やぶ}れし 腰^{こし}障^{しやう}子^こ斜^{しや}めに 置^おきて、 口^{くち}の 缺^かけし 爛^{らん}徳^{とく}利^り
 一^{ひと}間^まあり、 桐^{きり}の 古^{ふる}火^ひ鉢^{はち}斜^{しや}めに 置^おきて、 口^{くち}の 缺^かけし 爛^{らん}徳^{とく}利^り
 前^{まへ}に 横^{よこ}ひ、 凹^{くぼ}み 勝^{かち}の 藥^{くすり}鐘^{かね}背^せ後^ごに 仕^{つか}へ、 破^{やぶ}れ 盡^{つく}せし 更^{さら}紗^さ小^こ
 紋^{もん}の 坐^ま蒲^ふ團^{だん}二^{ふた}枚^{まい}敷^敷きて、 籠^{かご}甲^か張^はり の 長^{なが}形^{かたち}管^{くだ}右^{みぎ}手^てに 叩^{たた}き、

煙輪に吹ひて口頭尖らす一個の婦女、これは女房のお牧
あり、黒天鷲の襟掛けた假銘仙の爽衣に、南京縹子の帯
横玄に結ぶ、扮打からまづ亂暴まり、薄く蒼醒めし唇曲
かりに懐はせながら、
「眞個に仕様のかい飲んだくれだよ、朝ッから晩まで酒
ばかり呑んで居やアがッて、些少も人の言ふことハ聞
きやアしない、何ぞと言ふと直ぐ手を上あげて突然人
を打擲るんだものチ、出て行くなら出て行くが宜いや
、何ば此んな人間だからッて、ちやんと荒神さまが附
いて居らア、ヘン手前あんぞが居て呉れなくッたッて
な、結句一人の方が如何な安心ッて宜いか知れや
アしない、根が養子の身分で居ながら、親の家庫まで
呑んで仕舞て、其の上文句ばッかし言やアがる、眞個

に呆れ返ッて物も言はれないよ、行ちまへ、行ちまへ
、出て行て呉れりやア、本望だッ、
と泡を吹いて獨言つ、いかさま世間の道横に行く、是れ
ハ近ごろの蟹女房あり、餘りの言葉と聞き兼締てや表か
ら駆け入る羅女のお菊、見れば髪もおどろに亂れて涙の
痕のみ斑あり、行燈斜めに身を隔て、坐を占ひれば、
「チヤお前何處へ行て来たのだへ、此んち遅く歸ッて
来て、え、一体何處へ行て来たのだへ、
問はれて涙おし拭ふ、
「ハイ鳥渡と京橋の叔父さんまで行て参りました、
「え、京橋の叔父さん、京橋の叔父さんお何んの用があ
つて行たの、
「別に用といッてもございませんけれど、

言ひかけて膝おしすゝめ、

「お母さん

「何んたい

「只今表で聞いて居りますれば、

「イヤお前の妙なことを言ふのねへ、飲んだくれの事を

飲んだくれだといふのに、

「だッて主母、現在良人を捕へて飲んだくれ

秋の河水澄まし切て言ひながら、

いだし、

「だッて主母、現在良人を捕へて飲んだくれ

いだし、

「だッて主母、現在良人を捕へて飲んだくれ

いだし、

「だッて主母、現在良人を捕へて飲んだくれ

いだし、

「だッて主母、現在良人を捕へて飲んだくれ

いだし、

「だッて主母、現在良人を捕へて飲んだくれ

いだし、

「だッて主母、現在良人を捕へて飲んだくれ

いだし、

「だッて主母、現在良人を捕へて飲んだくれ

いだし、

「だッて主母、現在良人を捕へて飲んだくれ

いだし、

「だッて主母、現在良人を捕へて飲んだくれ

いだし、

「だッて主母、現在良人を捕へて飲んだくれ

いだし、

「だッて主母、現在良人を捕へて飲んだくれ

いだし、

「だッて主母、現在良人を捕へて飲んだくれ

いだし、

「だッて主母、現在良人を捕へて飲んだくれ

ふ人があるものですか、それは言ひ過ぎでございますよ、

「へン言ひ過ぎが聞いて呆れらア、

「今日といふ今日の追出して仕舞て遣た、

「え、何んと仰います、

「お父さんのお父さんで立て、

「お前さん、女房が亭主を追ひ出すといふ方

「お前さん、女房が亭主を追ひ出すといふ方

「お前さん、女房が亭主を追ひ出すといふ方

「お前さん、女房が亭主を追ひ出すといふ方

「お前さん、女房が亭主を追ひ出すといふ方

「お前さん、女房が亭主を追ひ出すといふ方

「お前さん、女房が亭主を追ひ出すといふ方

「お前さん、女房が亭主を追ひ出すといふ方

のいろの猶濃かきり、筋目を立て、乾度いへば言はせも

果てを叱り付けて、

「ね前も亦た親に對つて異見立てをするのかへ、私がお

父さんを追出すとも追出そまいども、お前の知つたこ

とちや無いぢやないか、朝ツから晩まで酒ばかり呑ん

で居やアがツて、些少も物の用にやア立ちやアしない

、そんな人を親に持つて居て、見るが宜い、お前方だッ

て一代出世の出来やアしないよ、

「出世の出来る出来かい、其人の運次第ぢやありません

んか、お父さんが何方か酒を召上つたッて、出世する

人の出世いたしません、假令如何いふ仔細があらうとも

夫れぢやアお母さんが悪うございませう、お父さん

を追出して仕舞てお前さんの如何なさる目的だか知り

ませんが、後々の事も能く考えて御覽あさい、乾度

未が能くありませんよ、

露を含みて言ふ我細見の言葉、あはれども聞かぬを剣

き出し、

「お黙り、お黙りてへばお黙りあさいかねへ、魔職あも

合ひもしない癖に老せたことばツかし言ひたがりやア

がる、

「いゝえ、黙りません、是が黙つて居られるものですか

、お前さんの最うお忘れあすつたか如何だか知りませ

んが、私のちやんと覺えて居りますよ、

「露しいねへ、お黙りてへばお黙りな、

「茂さんが二歳の年でございまして、是れも矢張り此ん

なやうな争論から、お父さんと別くにお成んなすッ

たことがございませう、其時お父さんの私と茂さんと
 を伴つて、澁谷村へお引越しなすつたこととございま
 したよ、
 言ひかけても涙のみ催さる、むかし思へば物として愁の
 種とあらぬなし、
 「お黙り、そんな事を言つたつて何んの益にも立ちやア
 しないよ、
 「澁谷村へ引越したからつてお前さん、お父さんがお酒
 をお腹めなさるンぢやアあし、朝ッから晩まで例の通
 り酔はらつてばかり居らッしやるから、小供の世話な
 んか是れンばかりだつて、爲すツちやア下さいません
 し、西を向いても東を向いても、茫々とした草ッ原で
 以て松風の音や虫の聲が聞えるばかりし、是れといふ知

己の方もありませんから、お父さんが留守の晩や何か
 の、恐くつて家内にも居堪りませんから、茂さんを脊
 中に負つて、裏の覆の下で泣いて居たことが、幾度あ
 ったか知れや致しません、茂さんのまだ頭は赤い乳香
 見て理由もなく泣き立て、空腹さうにむづかりまそ
 から、牛乳を呑ませて寐かして置いてちやア、私の神さ
 まへお燈明を上げて、願かお父さんとお母さんの情交
 が能くお成んなさるやうと、手を合せて拜んだことも
 、度々ございました、夫れに田舎の一ツ家でございま
 すから、誰れとて談話相手のでさいませんし、夜にな
 るとお父さんの酔はらつてお寐んなさいませ、洋燈の
 油のなくおつて消ぬて仕舞ひます、茂さんの夢に麗と
 れて泣き出しますと、私の眞個に如何しやうかと思つ

て、薄ッぺらな夜着の袖を噛み占めて、如何なに泣いたか知れや致しません、年齒も行かぬ小供のうちから、そんな苦勞をさせて置いて、此上まだ苦勞をせよと仰るのでもございますか、夫れれ餘りでございませよ、餘り御無体なお心でございませよ、無念に齒の根噛み占めて言へば、
 「は、喋々ど罵ましい、宜い加減にしてお黙りなさいト頭ごかしに叱り附ける、
 「だッてお前さん黙ッて居ちやア事グろりません、私如何な惨い目に遭ても宜うございませ、お父さんと呼んで上げて下さい、
 言えせも果てず、活ど急き立ちて、
 「此ん蓄生め、言として置けば餘計なことばッかし言や

アがる、
 「いぬ、餘計なこと、いふ道理のありません、お前さんのお爲めを思ふからの事でございませ、
 「は、まだ私に逆ふのか、
 言ひさま振り上げた烟管筒、あはれお菊は眉間深く打ち傷られて、血汐淋漓と雪の顔面横りて長く踐ぐ、風につれて舞ひ下る落葉の錦、谷川の波彩りて流るゝやうあり、
 、いかに誠き世の人ごゝろと云ひながら、宜きが上にも宜かれと願ふて、我嬢兒の花の姿に、錦の衣まで添へやらんと思ふ親もあるのに、如何あれバとて此の女房、
 、如右まで無慈悲に扱ふぞや、是れが惡鬼の化身にてもあるまじ、我顔ながら額に角かと思ふ程の無理非道、况して人さまのお眼からの如何ばかり、邪慳に見えるであ

らうと口惜しいな、かゝらも、お菊の空おそろしく、南無
阿彌陀佛と口に言ひて、心に助けたまへと恨つ、是れが
親なればこそ子なればこそ、他人に此の見事御覽せよと
見せたらば、嘆吐き掛けて呉れるものもあるまじ、
「お柳ちなすッてそれでお腹が思えますなら、何方でも
宜いお柳ちなすッて下さい、私共少しも痛くのをさ
ません、サアお柳ちなすッて下さい、お母さんサアお
涙聲に恨みのこゝろを籠め、身をさし附けて恐るゝ色も
なく言へば、
「眞個に強情き阿魔奴だよ、擲ッて呉れと望むなら何方
でも擲ッて遣らう、是れでも痛くないか、サア是れで
も痛くないか、

と續けさまに打下す彫管、振り上るたびにリウ／＼と響
く、痛さ身に染みて深けれど、こゝろが辛抱と身動きもせ
ぬ、柳の眉毛上越して滴る血汐の露、涙の交はりて恨み
の色冷かに傳へど、拂はんどもせむしをつきて、心に泣
く、いぢらしき、生命の疾より黄泉のものとして、今さら
未練に惜しいとも思えねば、擲殺さるゝとも然までのこ
とにあらせ、申るなら其の彫管一層急所に中ツて欲し
や、母の手づから殺されること何の苦勞に思はふぞと覺
悟の上には覺悟して、少しも悪びれた様子でもあらねば
、洗面の母親も責め疲れ、振り下ぐる手に煙草一服、
「蓄生、少しの骨身に控ねたらう、
言ひ捨て、立上るを、遣らじとか菊の秘を仰へて、

「お母さん、
稍々聲を震はせて呼べば

「おんだ、

と是すら咎めるやうに答ふ、

「それでお前さんのお心の濟んだかも知れませんが、私

「それでお前さんのお心のございますよ、

「手前の言ふことなんぞ、聞く耳の持て居ないや、其所

「お放し、私の外に用がある、

「假令お聞きおさる耳がよいにしろ、私の言ふ丈けの事

を言ひます、

「勝手おしろへ、罷ましたい、

「言ひかけて袖打拂ふを、

「お母さん、お前さんの如何あつてもお父さんとお別れ

なさいますか、

恨めしさうに下から視上げて言ふ、

「當然の事さ、

松の葉に置く秋の夕霜、少しだもこたへた様子あり、

「それならば私も勘考があります、婦女の子の婦女親に

附くが當然だと仰るかも知れませんが、私の如何あつ

てもお前さんの方へ附くの嫌でございます、假しん

ば如何な辛い目に遭たつて、お父さんのお傍に居たら

ございます、

再び催されてばらくと時雨色添ふ、

「そんな事言はなくつても宜い、如何ともお前の勝手

にするが宜い、

「何方を向いても骨肉の親達でございますから、お前さ

んお離れてお父さんの方へ附くといふ道理のあります
 まいけれど、お前さんのお同胞もありますし、私が居
 まいからッてお八重さんも居ります、夫れに斯うして
 住居もあッて見りやア、何方荒びて居ても雨露を凌ぐ
 丈けの事の出來ませうけれど、お可哀想にお父さんの
 方の只の一人も身寄の方でございませぬし、何處へ行
 くツたつて別に目途もありません、殊さらお酒が好
 さで見りやア、色く、と御介抱をしてお上げ申すもの
 がなくッちやア、定めて不自由でございませう、何方
 へ孝行するも同じ事なら、私のお父さんの方へ参りま
 す、お父さんの方へ参ッて充分にお世話がして上げた
 うでございませぬ、

言葉丹々しく言ひ放てば、

「お前と原から飲んだくれが好きなんだよ、此の畜生め
 、勝手にしろてへバ言ふことのないぢやアないか、
 女の癖に老せたことばッかし言やアがる、
 「ぢやアお父さんの方へ参ッても宜うでございませぬ子、
 「勝手にしろッてへバ、何時までもくまッついぢや
 アあいか、
 言ひ捨て、瓦類つく襖、やうく、捻ぢ開けて次の間へ行

お菊は當夜枕に就いて、さて熟く、と我身の上を考ふれ
 ば、是れ實に容易からぬ瀬戸際へ臨みたるあり、曩にこ
 當場の勢ひに乗りて、子として言ふべからざる言葉も返
 したれ、今とありて見れば後侮臍を噛めども及ばず、吹
 風寒く針を通す枕頭の壁の破れ僅かに洩れて萬々と響く
 霜夜の鐘、指を屈めて數ふれを夜い早や丑三ッ過ぎたり
 ける、父上の徹短慮、一時の怒り堪ゑかねて假へ當家
 を去り玉ふども、昨日や今日の事ではあし、長の年月た
 添ひあされたお母さまあられ、再び歸り玉ふ事もやと頼
 にうしろ髪を牽かされて、更深く歸り玉ふ事もやと頼
 き事頼みにもしたれど、更深く歸り玉ふ事もやと頼
 ちければ、さては兼ね、氣の早い御氣象、負けぬ心の

中之卷

雲

心迷ふ

霞亭

主

人稿



奥を見せ、必強く遠國をされたのではあるまい、若し其れあれば家にどつての珍事あり、假令貧乏はして居ても二親揃つておはしませば、家に珊瑚の物乾竿持ち傳へて居るよりも有難い寶あり、不仕合せに片々の親を飲けあされては、残るもの婦婦暮らしと唄れて、養はるゝもの三百の價値下る道理あり、原より婦女に生れた甲斐あさ、我身はいかやうにてもあれ、茂さん丈けは如何あつても、一人前の人間に仕立て遣りたき心地とする、今ですら近所のお子達と伴れ立ちては、ヤレ貧乏人の子よ、ソレ醉奴の息子よと、うしろ指さされて泣き出す事日に幾度あるやら知られず、之れを見聞く心の切あさ、折ふは、行燈の蔭で人に知られぬ玉の露、無分別に袖へ置くこともある、此上彼等に卑しめられて、婦婦育ちよ、

あし子よと言ひ離されては、成人の後所詮頭を上げることもあるまじ、只是れ丈けが可憐くてと愚痴やら怨みやら取交せて恨てば、心の憂は涙を作りて夜着の破れ目、冷かに風の吹きすかしける、世に正胤の便り聞き知られぬ一條あり、ようく人あ就いて聞けば、布哇國へ渡られたげあと言ふもあり、舊藩地へ歸られたさうあど噂するもあり、淺草で人力車曳いて居られたのを見たといふ人は、例の通り酔はらつてさと言はでもの事まで添へて言はるゝも口惜しや、此頃の夜の鐵道往生、首玉は飛んで見ゑぬさうなが、若し正胤殿ではあるまいか、恰ど夫婦別れを爲された日でござんすと、心切顔で延義でもあいな言ふもあれば、か菊は心も心からす母はと見れば

然のみ苦に病む様子もあつ、朝は十時に寐返りを打て
十二時近く床を出で、髪衣の百結裾引摺って水一杯汲
むでもあつ、幾十人どあく路次深く入り込ひ紙屑屋を相
手に、破蒲團古手拭足袋半纏と價を極めて賣り拂ふ、二
錢三錢の東西手に入れれば、直ぐ那れを買へ是れを喰ふと
言ひ、火鉢の前に入れば、大躰照何や彼やかき込んでのみ日を送
る詮あさ、我親あがら愛憎もコソも盡き果てよ、今さら
意見に言葉も出さ、あんの因果で此のやうな親戴くこと
ぞ寧ろ那の時死んだ方がかど、思はせ生命捨てる氣で言ふ
一、是れすら心推量られていぢらし、母は何時にあき機嫌聲
で、
「お菊や、お菊や、

と呼ぶ、お菊此時井戸端に洗濯の事稍々終りて、昨夜の
涙も今朝の露も清き水に滌ぎ果て、髪衣を竿に乾さんと
しつ、
「ハイ
と答へど走せ来る、見れを例の火鉢の前に二月以來能く
も見ぬ、笑顔ホク／＼傾けて、
「如何も朝ツから精を出してお呉れだことぞ、今日は
前にお相談事があつて呼んだの、私の言ふことだつて正
可聞いて呉れぬことはあるまいぞ、
齒幹一面に現しあがら、奥齒へ物を狭んだやうにいへば、
「アラお母さん何を仰います、お前さんの仰ることを聞
かあいで如何いたしませう、
言ひかけて其處に座を占めて、

「何なりとも仰い、私の身で足りる事から如何か事でも
 否やは申しません、
 殊勝に言ひ足して釋外すも可哀や、親子の縁の淡淺黄に
 水糸を細く糾り茶る、
 「外の事ぢやアないが、お前父ぢやんの方を如何したの
 「父ぢやんの方ッてお前さん、何處へ行たんだか一向行
 方が知れせんものナ、
 おぞく言て母の顔ット見れば、
 「知れなくッても父ぢやんの方へ行く氣で居るの、
 何氣なく言て彫管打叩く、れ葉は烟たさに垂頭れて、
 「知れなくッてもッて、
 是れ丈け言ひて口曇る、外せし襷口にして、悲しさ哀れ
 を右手に繰れば、涙に色の染りて長し、

「何だへ、お前は今何と言ッたへ、
 耳款て聞直す、
 「そんな事を仰ッたて、私は今何方とも申し上ることは
 出来ませんよ、
 「出来あいつてね前、夫れぢやア濟まあいなぢやないか、
 此間私に向ッて何んと言つたへ、大そう立派な口を聞
 いたやうだよ、お父さんに孝行するんだッて、大そう
 立派な口を聞いてたよ、夫れを最う忘れッちまッたの
 かへ、ちといと白痴おどしに言つたのぢやアあるまい
 、何ば私が馬鹿だからッてお前さん予に嘘されて驚く
 やうな記録はしさいよ、それとも眞個お孝行をする目
 的で居るのかへ、
 膝かし前めて屹度言ふ、今の笑顔は消ゑて痕さし、但願

うといふのではございませぬ、及ばずかから力を盡し
て、お母さんがお父さんに辛くさる丈け、私の心で
補ッて上げやうと思ふのでございませぬ、
言ふところ總て至誠の凝塊あらぬはあし、
「成程爾う聞いて見りやア私だッて理由もかく腹ア立つ
といふ心ではあいな、假へ如何も異似をされたからッて
、長年連れ添た亭主だもの私だッてそんなに憎いと
思やアしないが、然しお前の能く考ねて見てお呉んか
、那あ遣て一時の事からアいと出て行て仕舞れちやア
私の方で如何することも斯うすることも出来あいなや
あいか、出て行くお父さんは一人身で何一ッ厄介か
いから宜いやうさるもの、後に残った私の身を御覽あ
、此んか荒世体を脊負ひ込んで、資本の一文あるちや

アあし、商賣を始めやうにも何に取附かうにも、相談
相手になつて呉れるものもありやアしない、加之に小供
は澤山あるッ借金に親の代から利に利か積んで幾許あ
るども知れやアしあいな、這許でお前に逃げられて御覽
、私に誰を力に世を渡ッて行くことが出来るとお思ひ
だ、地獄でもしやアしましいし、些少だッて金銭の収入
やう筈があいなちやあいな、
或は言葉強くして言ふ、疾風の木の葉を巻くがごとく
或は聲を秘めて言ふ、小川の流れ巖を潜るがごとく、
恨みを交せて眉根屢々動き、哀れを訴へて眼皮屢次濕ふ
、聞きごにお菊は涙を呑む、魂も往き氣も乱る、母親
は猶膝を前めて、
「然しお前がお父さんに孝行しやうといふのを、私が途

中で邪魔する理由やア面白いよ、邪魔するのだから、
 思はれては切角私の心切も無にある道理だから、
 この事情を能く察して呉れなくツちやア不可ませんよ、
 宜いかへ、お菊、
 「如何してお前さん、そんな事は決して思ツちやア居ま
 せん
 咽びあきら言ひて復たさし垂頭く、
 「それあれば言ひて仕舞か手、實はお前の決心が聞きたい
 の、ナニも今日に限ッて此んを罷ましいよと言ふのぢ
 やア面白いけれど、私少し勘考して居ることがあるか
 ら、如何してもお父さんの方へ行くといい目的で居る
 のか、私や同胞の面倒を見て遣らうと思ッて居るのか
 、其處の決心が聞きたいと思ふのさ、私の前だからッ

て言葉を飾るには及びませんよ、如何ともお前の思案
 通りを言つて御覽か、
 問はれても最早や答ふるに言葉あし、父の恩は天にも比
 ぶべく、想ひ見れば蒼々として高く崇し、母の慈愛は海
 にも譬ふべく、考ふれば是も亦た蒼々として深く重し、
 身は天地の間に挿りて、心に無量の嘆きを抱え、想ひは
 二ツ身は一ツあり、今さら何れを何れども擇び難ねける
 「は、お菊、些少も遠慮するには及ばないよ、お父さん
 の方へ行くからッて私がお前を殺すとは言はないけれ
 ば、お前も小供といふぢやアあし、物の道理も少しは
 辨へて居るだらうから、私が後に如何位難儀するだら
 う位の事は考へて見て呉れても宜いだらうと思ふのさ
 、私の身体か入さまのやうに無病息才で居るのぢや、

石に食附いていも小供に難義はさしやアしさいけれど
、お前の知て居る通り常不斲身が惡くツて居るッだ
から、到底人中へ出て働くまどは出来やあしさい、お
父さん、行てお仕舞さるお前は行て仕舞ふとすりや
ア、跡に残るは小供衆ばかりだから御膳一ツ焚くこと
も出来さいだらう、お八重だからッて那の通りの乳臭
見あり、お市や茂は猶さらの事益に立ちやアしさい、
假しんば勝手位の事之私が出て差圖をするとした處が
、毎日稼いで呉れるものがあくツちやア、親子五人の
露命を繋ぐまども出来さいといふもの、私が困らうが
同胞が飢死しやうが、私の知たことちやアさいとお言
ひなさりやア、夫れまでと諦めもしやうけれど、親子
同胞の間といふものはそんな薄情いものではあからう

と思ふんだよ、一体お前は如何決心をして居るのだへ
涙に露の色添へて言ふ、世に哀れてふ事知らぬものあら
ば知らず、秋の夕暮れ身は早や寝る、お菊とヨ、と聲を
放ちし顔も擡げす打抱て泣く、
「泣いてばかり居ちやア理由が分らないちやさいか、私
の言ふ事が腹へ這入たら何故何方とか返事をしさいの
だへ、
畳みかけて問へど其の甲斐あらねど、
「ちやアお前は如何あッてもお父さんの後を追掛けやう、
と言ふのだ子、
「いゝえ、
頭打振りて僅かに答ふ、
「ちやアお父さんの方を斷念して仕舞たの、

笑を含みて復た占同ふ、

「はい、

是すら唇を洩れしのみあり、

「そりやアお前眞個の、私の前だぶら遠慮して居るの

ぢやアあいかい、

「いゝね、

「ぢやア間違ひはあいだらうねへ、

「はい、間違ふやうなことはありません、

即ちお菊は彼の蒼々を捨て、此の蒼々を仰きたるあり

、母親は笑ましげに、

「それでこそ親孝行を婦兒といふもの、如何あつてもお

父さんの方へ行く氣で居たから、私はお前を殺して仕舞

ふかと思つて居た程だ、サア最う泣かあいで笑つて

お呉んか、

恨みに握る手の掌裏して、撫でるやうに言ふ心の恐れさ

、親ががられ菊はツツと保ふて、

「最う御用はございませんか、夕飯の準備をして参りま

せう、

涙藏して釋手に把れば、母親は機嫌顔で、

「まあ宜いから談話してお出で、まだお前五時にしきや

ありやアしさいよ、

呼び留めて莞爾と笑ふ、同玄烟草の烟にはあれを昨日は

頼の角に簇り、今日は言葉の花に匂ふ、

「眞個にお前は可哀想だよ、稚さい時から苦勞ばツかり

させて、

言ひあぶら覗えやうに顔ツツくと眺めて、

「大さう顔色が悪いやうぢやないか、何處か病いのから
お醫者さんを呼ぶか宜いよ、大したことぢやアぢや」と
思つて打捨つて置いてちやア不可せん、
言葉は益す優しく成りて顔の色も追々開くやうあり、何
處を推せば其のやうぢやア言葉出るであらう、昨日は噛み附
くやうに言ひて今朝は睨み殺すやうに見る、是でも親は
ど思ふをかり空恐しく見し面地の今は優かに唯愛嬌のみ
満ち溢る、
「時にお菊、
一言聞くごとに胸刺さるゝ如く思ふ、是にても親あり子
あり、何の因果か我々が不思議ありける、
「はい、何歎御用でございますか、
「今のやうに言て置いて、亦た此んか事を言ひ出したら

、定めて實のさい親ども思ふであらうが、今も呉ぐ
言ふ通りお父さんが行てお仕舞ひあすつちやア、誰と
てお金銭を儲けるものもないから、さし詰め明日の糊
口にも困る事だが、ね前の心に何歎宜い考は浮ばさ
いかへ、勿論私で出来る事から假へ如何辛い事でも
、我兒には代わられさい耻辱を忍んで遣て見やうと思
つて居るのだが、
言ひかけて四邊見廻し、
「實は一時の間違ひから、お父さんと那んぢや合ひもし
て見たけれど、斯うぢやア後悔の外はさいのさ、
お酒を飲んで無理はお言ひあさるやうぢや、些少
づゝでも儲けて下すつたから今までの處は飢も凍もせ
ず、如何か斯うの人并に生計を附けて来たけれど、夫

れが赤くなつて見りやア如何あつても私かお前の働さ
で稼き出さにやアからかいだらう、夫れも一人か二人
の生計から、人さまの洗濯ものをしたからつて、食ふ
に困るやうあまとはかいンだけれど、何を言ふにも耶
の通り大勢の小供を控へて居らやア、生ぬるツまい腕
で持切ることは出来やアしあ、時と品に依ちやア随
分人の玩弄物にもあらねばからせ、辛いと思ふ事も差
しいと思ふまでも眼を閉いで遣らねばかりませんよ、
意味ありさうに微聲で言て、折く斜めにお菊を見る、
「それはお母さん、主公の仰るまでもあ、婦女の腕で
是れ丈けの小供を育て、行かうと言ふにやア、一通り
や二通りの事で遣り通す事は出来ませんよ、私だつて
其通りでございませす、是れとて手に覺えた慈はありま

せんし、外に如何するといふ勘考もありませんから、
斯う申しちやア薄情な事をいふやうでございませす、
自分一人身の事から兎も角も、お母さんから同胞の事
まで、不自由かしにまてお上げ申すことは、到底出来
まい相談でございませす、出来まい相談と知りながら這
許で斯うして談話を極めた處が、結局は何んの益にも
立ちませんから、お前さんがお父さんの事を眞個に後
悔して居らツしやるのから、此んを歡はしいことはあ
りません、如何してありともお父さんの在家を尋ねて
今まで通り戻つて戴くよう外はありませんよ、お父さ
んだつてまんざら物の分らぬ方ぢやアありませんし、
其處は小供といふ切て切られぬものぢやございませすから
、それでも頑固に歸らぬとは仰いますまい、

言はせも果てず、手に持つ彫管強く打叩きて復た唇を前へ反す、佛心かと歡び見しはホンの其場の空頼め、矢張り舊の沐阿彌ありける、

「いゝね、そりやア不可ませんよ、惡體黙言ひ合つた末、出て行け、出て行くと言葉が募つて、其のまゝ二ツに別れたんだものナ、今から歸つて下さいと言つたて歸つて下さる氣使ひもありますまいが、私の方から手を下げて頼んで行くことも出来やアしさい、

「サアそれだから不可ないと言ふのでございます、假へ如何ち仔細があらうとも、亭主に手を突いて謝るのは決して耻辱にはありませんよ、

言ひあがら返答甚麼と待てば、

「私にやア夫れが出来さいのだよ、手を突いて謝る位さ

唯何處までも曲んだ道行かんどありける、

「ぢやアお母さんは何とするお目的でおさいます、如何して生計を立てやうと思ひあさるのでございます、

それが承はりたうございませす、

「如何するつてお前、別段外に仕様がさいからお前に孝行をして貰ふのさ、

憎や嘯いて頬撫でます、

「何んど仰ります、

屹相變へて儼然問ふ、

「私はお前の親だから子、お前に孝行をして貰ふと言つたのさ、

頬撫で去りて廊の邊り摩る、

「それは今さら仰るまでもない、先刻も申しませす通り孝
 行は何處までも盡さうと思つて居りますすけれど、私が
 孝行をしたからつて生計が饒かにあるといふ道理はあ
 りますまい、
 胸の叢雲又た騒立つ、時雨て社破れも寒し、
 「爾うさ、親の前で泣くのばるりが孝行ではあいなだよ
 、お前のやうに分らぬやア私が飢し死んで仕舞て
 も、棺桶の前で涙を流してそれで孝行だと思つて居る
 だらう、人をつけ、そんな分らぬやア嫁兒が今時の世に
 あるものか、梳髪女のお銀さんの娘を世間の婿兒を見
 るが宜い、梳髪女のお銀さんの娘を世間の婿兒を見
 前々一ツ若けれ、宜い旦那を持って親達に樂をさせて
 居るぢやアあいか、那の子あんざアお父さんがお死な

すつても涙一ツ溢さかかつたと言ふ評判だ、お前のや
 うに、お父さん、お母さん、お母さんの孝行
 の國に在るもの歟、泣いて孝行に在るのから雨蛙や燕
 兒は定めて澤山御褒美を貰ふだらう、お母さんの孝行
 といふのはそんなケチをいふのぢやアねへ、世間
 の婿兒のやうに、早々お金に成るやうな事をしてさ、
 何時までも親に百結度を下げさせて置かないで、宜い
 加減に左圖扇でも使はせろと言ふのだ、生刻から色々
 謎を掛けて見ても夫れ丈けの心が解けねへんだものナ
 、「眞個に此んか奴つてあつたもんぢやない、
 哀れ地金の今現は此の言葉を包み居たるあり、
 し心も、全くは此の言葉を包み居たるあり、
 「當て附けて言ふのぢやアあいが、お前も能く考へて見

が宜いよ、横町の牧さんとお前とは手習ひ朋輩で大
そうお交情よしだが、お牧さんは去年の暮れから芳原
へ身を沈めて那の通り孝行をして居るし、叔母さんと
このお鶴さんは、芳町で藝妓にかつて居るし、叔母さんと
行くをして居るぢやアか、又た此方が悪いか知らんが
ど、何れだか身代が違ひます、又た此方が悪いか知らんが
前頭の悪い該は掘てもあひ、又た此方が悪いか知らんが
奇、今日に困るといふ程でもかくつて夫れでせへ親の
爲めだからつて自分で那あいふ苦勞を爲さるぢやアか
いか、それに比べて見りやアお前さん、泣いて居るば
をしたつて耻しいことはありませんと、泣いて居るば
かしが、おぢやアあいら、其處の道理を能く考へあ之
ッちやア不可あひ、呑んだくれのお父さんが家に居ら

やア、ヤン先祖の手前が如何した事の士族の名義が如
何した事のつて、直き頭とあしに叱り附けてお仕舞ひ
あさるけれど、今どあつちやア先祖に關白の位があッ
ても、士族の名前に義理があつても、そんな事を言ひ
立て、居ちやア家の生計が立ちませんと、那の人が居
さい丈け此方の仕合せだ、早く眞個の孝行がして貰ひ
たいと思ふのさ、
想へば多年の情愛を捨て、煮鷺の夢二ツに割りたるも此
の心を致すべき爲めありけり、
お菊は唯鷺さ呆る、今さら言ふべき言葉とてもあらねば
、さて垂頭て垢染みし襟へ顔半ば没し、忙然としてそこ
は、あたく思ひ沈む、一縷頬をかすむる髪、心の亂れは
是れありける、聴て母親は立上りて、

「爾うさ、是れ丈けの事だから急に返答も出来まいだらう、私は是れから京橋の方まで行て来るから子、能く勘考をして置くが宜いよ、同胞四人と親一人、殺さうとも活さうとも、お前の勘考一ツにあることだ、宜いか今夜まで且能く考へて置きさ、言ひ捨て、帯引き締め、心は前か後齒の下駄響かせあがら立ち出でける、後にお菊は聲立て、泣く、何から恨みを敷へんにも心は乱る氣は結ばる、

「餘りだ、餘りだ、是れ丈け言ひて、ワツと泣き伏す、何方何んだって餘り惨い為され方だ、世間のお方は如何にしる斯うにしる、私は女郎あんに為りたくはあ



かません、女郎や藝妓を宜いことだと思つて居らッし
 やるか知りませんが、それは人間のうちへ這入らさい
 と言ふぢやございせんか、何方お酒を召上ッたッ
 てお父さんはまだ本性がおあんなさるから、そんな卑
 しいことはチクビにもお出しなさるか、何處へお出でなす
 れ母さんは那れだから困ッちまふ、私かお父さんをお
 ヲたといふ目的の知れぬ、大方此んさことだらうと察し
 慕ひ申さうと言つたのは、大程口惜しくツてあら
 たからの事か思ひ出せば思ひ出す程口惜しくツてあら
 さいと、
 袖噛み占めて少焉は涙あり、
 「親の口から宜い人の眞似をしると仰るのあら知れて居
 るが、女郎にあつた孀兒の眞似をしると仰るお母さん

の心が恐しくって、おちやアあるまいし、原はどいへば、是れが生れ付きの貧乏人の心、正しに家に生れながら何方孝行の道に協つて居るから、ッて、世の玩弄物となるのは嫌だ、假しんを親に追ら、れて私に泣く、辛抱しても、物堅いか父さんがお聞き、きあすたら、嘘どかし心外に思召すであらう、先立てもお銀さんが来て、主公とよちやアお菊さんが綺麗で居らっしゃるから、今にお樂が出来ませうとお言ひあすたら、お父さんが大さう御立腹をそつて、田中、正胤は男兒で、お父さんが大さう御立腹をそつて、田んつて、散さお言ひあすたら、事、何かお思ひ出さす、眞個に悲しく、涙が溢れる、ア、お父さんがお出で、あすつて下されば宜い、何處へ

我を忘れて打恨て、徳利の口も飲けて、甲斐なく、世に耳ありといふ壁訴、物言へば透間洩る風のみ、繁くて唇寒く思はるゝのみ、ア、此んお事は言たつて無益な事だ、那の通りのお母さんだから言ひ出した事を後へお引きなさるやうな事は、はあ、あるまいし、夫れかと言つて如何な事にも、次郎に成らうとは死んでも思はれまい、逃げる先があるから、逃けて行きたいけれど、此んお事を人に話せば、親の耻辱を世間へ吹聴するやうなもの、女郎に於る位なら、炊奉公でも厭ないと言つた處が、炊奉公の給金位、お母さん一人の食口にも足りやしないだらう、今夜まで、別にお勘考し、仰つたつて、別に勘考のしやうも、ない

否でございませと言つた許しちやア下さいませ
まいし、行くといやア身を汚されて明日から人の玩弄
物に成らねばからかい、人の玩弄物に成るのも宜いけ
れど、それでは一代廢物に爲て仕舞ねばからぬ、
想ふまゝとて幾度か胸に手は置けど、一代の難身に降
りかゝれば、涙の雨は愁の雲繁く驅つて溢れ出づ、進むに
も退くにも身は早や維に谷りぬ、
「廢物、寧ろ廢ものに成て仕舞ふ位から、耻辱を見ぬら
ちに死んだ方がましだ、
可哀やまゝまで思ひ追りける、
「今までだつて死さうと覺悟したことは、幾度あるか知
れやしさいけれど、色んな事に牽かされて今日まで生
命を惜しんで居たやうなものゝ、最う斯うさつちやア

仕方がさい、外の同胞だつて大きくありやア、皆私
のやうに苦勞をするのかと思へばそれが可哀想であら
さいけれど、是も前世の約束だらう、ア、死さうく、
死んで苦勞を逃れた方がいゝら幸福だか知れやアし
い、
殊勝に覺悟は極めながら、今宵に迫る生命かと思へば甲斐
なくて、幾回涙おし拭ひ、
「爾うだお母さんがお歸りさすつたら、宜いやうに言て
置いて今夜のうちに覺悟をして仕舞ふ方が爲めに宜い
だらう、
世に恐しき鬼はありども、お菊が今日の心を聞いて争で
一滴の涙を灑がざるべき、
「姉や如何したの、何をそんなかに泣いて居るの、

慰め顔に背後から問ふ、
 「チヤ茂さんかへ、何處へ行て来たの、大さう大人だこ
 どね、お勢ちやんは如何したの、
 涙を拭きながら、お勢は顔世なし背後か
 ら抱き附きて、
 「姉や負ふしてお呉んか、お前今何を泣いて居たのだへ、
 是すら曇り聲を言、ふ茂は今年七歳にてお勢は漸う五歳
 の冬あり、
 「チ、お勢やお前も大さう大人たこと子、サア姉やが抱
 こして遣らう、宜い子だ宜い子だ、何處へ行て遊んで
 来たの、山内へ行て来たの、爾う、それは宜かつた子
 、ふんおまお冷つたい顔をしてさ、さぞ寒かつたら
 う、今に姉やが宜いものを買て遣るよ、

「坊にも買てお呉んか、
 「ア、く、買て遣るよ、
 言ひながら両手に抱いて泣く、是を永別と思へばかりけ
 る、
 「アヲ亦た姉やが泣いてるよ、ナセそんか泣くんだい
 、泣いちや不可憐いのよ、泣いちや不可憐いの、ねへ
 茂ちやん
 「ナニ泣いてるンぢやアかいの、姉やは今欠伸して涙を
 盗したのさ、
 言ひ紛らして力強く笑へば、
 「爾う欠伸したの、可笑いことねへ、
 諸共に笑傾けて、袖の百結を遊びながらお勢は落ち布く
 姉の涙を指に染めつゝ視上るも憂しや、見れを此兒の眞

はしき、まだ稚兒櫻色調はねど吉野の花は、嫩葉より色
 香芳ばし、眉は遠山の霞を置きて、瞳子は秋の夜の星を
 宿す、成人の後には花も月も差づべし、我身の今に思ひ比
 べて、美はしき丈け苦の多かるべく飽かあるに附けて行
 末の想ひ遣らる、思へば拾も涙あり想へば恰も涙あり、
 涙も露も乾く隙なき、骨肉辛苦の世界とや言はまし。
 「勢やも茂さんも明日からは大人しくあさいか、姉やが
 居かいからって喧嘩かんとをしちやア不可せんよ、
 お母さんの云ふ事は能く聞かあかつちや成りませんよ
 、今日は私が居るから宜いけども、明日あらん何事も
 お八重さんの言ふ通りに成つてお出でな、
 「アイよ、
 お勢は恰削く測れて言ふ、

「茂さんも宜いかへ、忘れちやア不可かいよ、
 「ア、宜い、姉やは何處かへ行くの、
 茂は言葉を咎めて問へば、
 「いゝね、何處へも行きやアしさいけれど、唯斯う言て
 頼んで置之のさ、
 言ひかから急に思ひ出したやうに、起ち上りて帯締め直
 す、
 「アヲ姉や何處へ行くの、
 「お前と茂さんを伴れて子、是れから愛宕山へ参つて來
 やうと思ふの、宜いものを買つて上げるから一所よお出
 でな、
 「ア、行くよ、連れてツとくんか、
 二個は嬉しさ立上りて、双の袂に取纏り下から視上げて

歡ばしさに振り動せば、お菊は見遣りて復た袖に露置
 く、
 「眞個に宜い子だこねへ、お母さんが歸つて來ると不
 可あいなから、早く行て早く歸らうねへ、お勢お前寒く
 さいの、私の半纏を着せて遣らうかへ、
 「アラ姉や私は寒くさいソだよ、
 「爾う、ちやア茂さんワ、
 「僕も寒かア無いや、姉やの方が寒いだらう、最う一枚
 お母アさんの衣服を着てお出でさ、
 是れすら心慰めんとして笑傾けて言ふ顔の疾風さ愛らしさ
 お菊は双手に二個を携へて悄々と我家を立ち出づ、今
 日の寒さも理りや、天一面の雲催ひにて、雲に愁ひを盛
 ねて濃かあり、

這許から愛宕山まで三町餘り四町には足らず、心其處に
 あらざれば、踏む歩も抄らす夢うつゝ唯引かれ行くゆり
 二個は行く、語り合ふて、慰め顔に何やらん言ひ出
 れを、耳には入らず点頭のみ、到り見れば早や黄昏は過
 ぎにける、遊勝の客已に去りて身をこがらしの音淋しく
 添ふ、お菊は社頭に頓首て、稍々少焉祈念を凝らす、今
 日を限り、我が家の事に於ては同胞四人の身の上、只管行末のみ
 母の事、我が家の事に於ては同胞四人の身の上、只管行末のみ
 を想ふ、父の身に過失あらせ玉ふあ、母のこゝろを和げ
 玉へ、同胞四人の幸福を此上とも守らせ玉へや、
 「茂さん能くお参り申したかへ、お勢お前も御参詣をし
 たらう子、
 「ア、今参つたよ、

「爾う、ぢやア歸ッて行きませうねへ、念々終りて石階を下る、見渡せば街の頭り露に夜店を張るも多く、雨側に硝燈の光り繁し、

「様さん、何かお前に買上げて上げやう、何か欲しいんだへ立留りて微聲で問へば、

「僕は石盤が宜いや、

「石盤、ぢやアお勢は、

振返りて言葉優しく問ふ、

「お勢は何んでも宜いの、お銭が入ると不可いから何んにも欲ぢくないの、

ア、是れすら貧しき間の兒あり、幼心に色々の事聞き知ッて、姉のお入るの淋しさを推量る、聞くと哀れやお菊は早や涙含みて、

「そんな事を言はちくッても宜いよ、今日は姉やがお金を持てるから子、何んでもお前の宜いものを買って遣るぐ、サア何か宜い、何んありとも欲しいものを言て御覧、

柔かに額際捻で擽りて言ふ、

「私は少ちや箱が宜いのよ、

「アノ何かへ、先達て姉やが勤工場で買たやうさ、那あいふやうさ箱かへ、

「ア、那あいふンで以て子、最う少し少ちやいのか宜いのよ、

「少ちやいの、宜いよ買上げて上げるよ、

是れ今生の暇乞ひ、紀念残して遣らんどありける、

聽て店先に立留りて、懐中に財布の中を檢ひ、原々り今

さし出すを双手に受けて、
 「眞個に宜のねへ、姉や有難うよ、
 歡ぶ顔を見るに附けて復た涙のみ催さる、是が現世の紀
 念とは知らずや、茂御身は記憶せよ、九々苦勞の嘆きの數を
 までからず、茂御身は記憶せよ、九々苦勞の嘆きの數を
 追ひ想はれ算へて見よ、石に書く字は拭はれ消ゆべし、
 今日涙は絶ゆる事なし、お勢御身は忘るるや、此の小
 箱には涙のまゝ入る、開いて憂を放んには心の錦も疊みて
 よ、操の花も挿してよ、開いて憂を放んには心の錦も疊みて
 打恨ちつゝ力かち歸路に向ふ、まだ甲夜あがら寒さ身に
 染み渡りて、風の間にひらく、白く雪降り初む、
 「チャ悪いものが降り出したよ、澤山積ると不可かいか

の生計あり、其日の生計さへ其處へあるを、争で其身
 に餘りあるべき、來る正月の小使錢、我身のこととは兎ま
 れ角まれ責めては稚き小供だけ、人並の春景色粧は
 せ遣りたくて時宜に依りては羽子板の一枚奴紙鳶の一ツ
 もと、六月頃から心掛けて一厘二厘の塵を拾へど、嘆き
 の海の深くあるのみ、世に寶の山とは作らず、數れば十
 錢と八厘五毛果敢なく底の見られにける、
 「オ茂さん石盤だよ、最う少し大きいのを買って遣ると
 宜いだけけれど、今日は是れで辛抱しとをきか、今に
 宜いのを買って遣るよ、
 言へば頻りお点頭て、
 「ア、有難う是で澤山、
 「お勢のは是れが宜いだろ、一閑張にあつて居るから大

らお勢も茂さんも急いでお出でさ、
 携へ合ふて道を急ぐ、
 歸り來れを母親は例の火鉢の彼方に座りて、
 若々しさうに葎草煮らす、
 「お母さん何時お歸りあすッて、ちよいと愛宕山まで行
 て來たもんですから、
 押鎮めて如右言ひ云であがら、袖にかゝる雪振り拂つて
 其のまゝ其處へ膝行上れば、
 「何んだッて今ッころ愛宕山へ行くんだねへ、淋しくば
 ッありあッて面白くも何んともあいだらう、
 「爾うですども、それにお天氣が此んあですから些少も
 何んにもありやアしませんよ、
 勤めて何氣あさ体を粧ひ言ふ、

「先刻の事は勘考して見たの、
 早や詰るやうに問ひ掛けよる、
 「ハア勘考致しました、
 「如何勘考したの、
 「如何勘考したッてお前さん、斯うあつちやア仕様があ
 いぢやありませんか、同胞や親の爲めあら辛い何ん
 のッて言ッちやア居られませんか、
 我は女郎にでも
 何んにでも成りますよ、
 言ひも果てず顔そむけて、横まに眼皮おし扱ふ、
 「ぢやア私の謎を解いて呉れた子、それで私も氣か樂々
 としたと、ナニお前一時さへ大人しく辛抱して呉れり
 やア、其内には如何かして受出せぬこともあるまいし
 、其處は婦女は玉の輿だア子、如何あ宜い人に見染め

られて奥さん御新造さんと呼ばれる身にあるかも知れ
やアしさい、そんなに快く思はさいが宜い、人間は
七轉び八起といふから、今に宜い春が向いて来るかも
知れさいよ、

忽地にして機嫌顔あり、

「お八重や、ちよいとお前頭の肴屋へ行って子お刺身は出
來さいの聞いてお出で、姉さんの返事が大そう宜い
から前祝ひお一杯遣らうよ、

誠に是れ鬼あり蛇あり、我子を苦海へ突落さんとしてま
づ歡びの盃を擧ぐ、此場このばに當るお菊のこゝろは如何に、
哀れを知れるものは察せよ、

下之卷

雪消へゆく霞亭主人稿

夜は早や深けぬ、松風の音吹きたもみて戸細にそよぐ吹
雪の響き、疎々として枕に傳ふもさみし、兼ねて今宵を
限りと定めて、瀬戸の真垣に置く白雪果敢なく消ゆる生
命と思へば、心のみ甄りに願かれて世に夢といふものは
見られず、胸に手を置き熟くと考ふれば、誠に是れ身
の死時ありける、父は遠くへ姿を埋めて母はやうく横
道へ這ふ、同胞は多く家は貧し、此上果敢なき生命存
へしどて、何時の日一陽の春に逢ふべき、百結爽衣に垢
半纏憂を荒家の風に曝らして、甲斐あく一生を終へんこ
と、人間生れての樂しみとは言はれぬ、況して婦女の徳
を捨て、苦海の淵に沈むこと、先祖の名までを辱しむる
あり、母の言葉に戻ると言は、兒として不孝の名は免れ

さるべきも、身を擲ちて操を全うせしといは、人ど生
れし甲斐もあるか、我身死せば母も覺らん、甚麼邪慳
か生れども、子を殺して氣味好しと笑を含むものはある
ま、此後我兒我手足を賣りて、不義の榮利を得んとは申
ば、されども、然すれば残る妹兒の爲め、母へ竟見をするに
似て捨てる生命も惜しうは思はず、之れを恨みの前から
考ふるも、將た涙の後から考ふるも、死ぬるに九分の利
益ありて生くるに寸毫の頼みあし、先づ不孝の罪は深
れど此れも前世の約束事と、お免しあされて下さりませ
、打恨ちつゝ夜着の袖掻き除けて、靜かに首を擡げ
、から、押鎖めて時刻を付れば、枕邊幽かに豆のやうな燈
火はのく、残るも哀れや、按摩の笛の響き湧へて腕車の

音の途絶へしを想へば、丑三ッ過ぎて寅の刻近く思はる
お菊は獨り点頭してト起上りあふら、唐輪細の細帯心難
手に引締む、父が秘蔵の一刀にて陀羅尼勝國の銘ありと
いへるもの、甲冑の程取出して蒲團の下に藏し置きしを
、行燈の火掻き立て、抜き放して屹度見れば、いか
さま銘工の手に成れるもの、焼刃の匂ひ乱れ、て、秋
の水滴るばかり、皓々膽を照して寒し、
「是で宜い、是で死ねを本望だ、
獨言ながら舊の鞆に納めて、母の寐顔つく、と見守り
枕邊近く平伏して、ハ、と涙を流し、
「お母さま、長々お世話様にありましたが、私は最うお
暇を致しますよ、老先長い身を以て親に背いて、死た
くはありませぬ、如何考へても人間は人間、犬畜生の

眞似は出来ません、私が斯うして相果てますのも、一
ッにはれ前さんのお心を眞直に治してお上げ申さうと
思ふからの事でございませす、此後如何にお困りあす
ツたからって、二度と再び同胞のものを女郎に賣てお
金錢を取らふかんで思召すか、お市だッてお勢だッて
、皆私の同胞でございませす、正可とあれば生命を捨て
、私の通り死んで仕舞のは、知れ切ッたことでござい
ませよ、

言ひかけて眼皮おし拭ひながら、おぼろに霞む眼を屢叩
きて、眼叩きもせず母の顔ジツと見る、是れが現世の見
納めど心に果敢なく思へばかりける、
「まだ宵の御酒が残ッて居ると見へて、眼元がぼんやり
と朱くあつて居る、お年齒の加減やら世帯の苦勞やら



新行定

是言も 苦勞果て、又た彼方振り向く、見れば可哀や幼心に彼も
 近頃はめつきりどね瘦せあすつて、眞個に舊の姿
 はありやアしさい、是程心配をあさる程から、外に何
 方も仕様がわるんだらうもの、浮世の義理の抽斗を取
 違へて居らッしやるから、それが誠に可哀想であら
 さい、是でも私が死んで仕舞たら、少しは御後悔なさ
 るかも知れさい、それを頼みに死まする、
 咽ぶやうに聲を曇らせて、
 「ね母さん、それを便りに私は死ますよ、ね前さんは今
 のお心を治しなすつて、書を通りお父さんをお呼び
 ますつて、爾うして万々歳の御壽命をお祈り申します
 よ、
 見れば可哀や幼心に彼も

ける、幽き燈火の影到るとある、何れ哀れの宿からぬは
 かし、
 「お八重さん、此んかことを言ちやア逆まのやうだが、
 後の始末を宜くお頼み申しますよ、お勢が風邪でも感
 いたやうあら、丸八の清婦湯を飲ませて遣て下さいか
 、茂さんの合薬は寶丹が第一だも、お前も能く氣を注
 けてお暮らし下さいか、病氣にあつちやア何にもあり
 ませんよ、
 言ふうちにも幾度となく涙拭ふ、
 「茂さん、お前は能く勉強して立派な人にならなくつち
 やア不可せんよ、少しだつてお父さんを見習つちや
 ア碌ちものにある事ぢやアありませんよ、今日買った石
 盤を見たらば子、姉やの事を思ひ出してお呉んか、姉

やの事を思ひ出して呉れたらば子、後生だからお前の
 口から、念佛の一ツも唱てお呉んか、宜いかへ、能く
 お前に頼んで置く、
 早や堪らず、一聲立て、泣かんとして慌て、袖を噛み占
 めちがら、四邊静かに見廻して、
 「お勢だつて今日の事を忘れちやア不可せんよ、那の
 箱を姉さんだと思つて、大切に置いてお呉んかさ
 いか、
 限なく心の誠を籠めて、涙あがらに言ひ出づれど花に向
 ッて想ひを訴ふるよりも詮あし、雨戸の隙間洩れて入る
 冬の夜の風、習々として燈火の影休すやうに吹き渡るの
 み、
 「私が是れだけ心を籠めて言て居るのを、此の人達は夢

にも聞いて呉れたいだらうか、少しでも字の書ける
 身あら、思ふ事の百分一でも遺書にして置きたいけれ
 ど、
 後には續く言葉もかくて、悄然として垂頭ける、願れば
 万籟寂として音なく、蕭條の氣唯四方を囲む、聞ふるも
 のは木梢の雪の風にただれて、澎湃と地に落るのみあり
 「何時まで斯うして居たからって、名残の盡きる時はあ
 いだらう、若し見咎められるやうな事があるやア、
 切角の心配も水の泡にして仕舞ねばあらい、
 思ひ直して短刀取直す、
 「這許で何んしちやア物音に驚いて、誰かい眼を醒ます
 かも知れあ、ソツと忍んで裏口へ出やう、裏口の櫓
 下には幸ひ炭俵があつたツけ、那の上で、爾うだ那の

上で、
 復た起ち上りて振り返り見る、まだ牽かされて今一眼と
 思ふなりける、
 「れ母さん然らばでございますよ、お勢も茂も然らばだ
 よ、
 言ふより早く行燈吹き消す、暗黒はあやかし露も取も、
 皆埋られて眼に遮るもの今はあく、此處彼處壁の破れを
 穿つ雪の光りぞ明かりける、
 立出て見れば實に降り積りけり、雲も何時しか晴れ散
 て、天には星の影氷る、半輪の月光り冴へて白きが上に
 白きを照らせば、世に水晶の宮もかくや、
 「大そう綺麗に降たまど、此の景色も今夜が見納めにあ
 るのだ、

少焉、雨戸の戸口に立つ、柴の垣根に花開き、井桁の繩に
 瓊飾る、見るものとして此の雪景色、美事は心往くばか
 りあがら、お菊の身には是れすら甲斐なく我身は旭を待
 たで消ゆ、樓ふれを年紀まだ二九に足らず、世に花開く
 時にも逢はで、世に瓊かざる折にも會ここで、
 「南無阿彌陀佛、怪我にも床しき春を語らず、思ひ
 哀れ此の半点の朱唇、怪我にも床しき春を語らず、思ひ
 迫りて果敢なき秋を洩らす、
 「今さら未練に心後れがしちやア覺悟の前も耻かしい、
 お菊はやをら前み出て、炭俵の塵打拂ひあがら、月に向
 ツて正面に双座を占む、
 「今果の際にお父さんへお暇乞ひをしあいのが残り惜し
 いけれど、何んといッたッて仕様があゝ、私死んだ

どれ聞きあすッたら、定めてお嘆きあさるであらうが
 ・是れも約束事と諦めて此上のお願ひには、最一度お
 母さんの家へお戻りあすッて、如何か身代を大切に再
 ひ盛り立て、下さいまし、那れ丈けお好きあ酒だか
 ら斷然れ止めあさいとは申しませんが、私の心を可哀
 想だと思召して、少しは謹んで下さいまし、此れが今
 生のお願ひでございます、
 涙あがら伏し拜みて、復た稱名ぞ唱へける、思ひ乱るゝ
 事あきやうと細布取出し膝の邊り堅く結び、坐を改めて
 短刀抜き放てを、月にも雪にも映り添ふて、物凄さまで
 尖頭閃く、
 「南無阿彌陀佛、皆さま然らば、
 言ふかと思へを玉の後頭二分餘り白刃現はれて、俯伏す

襟に鮮血淋漓と傳ふ、檜皮の庇かすめて積む雪の邊り、恨みに消へて紫の痕繁く流る、

一 ぐれ 畢

浮世舎まゝ上著

探偵第三集 福島中佐

一冊正價七錢 府外郵税二錢

峻嶺の雪、沙漠の月、一鞭五千里を横行して、大和民族近代希有の快男兒、偉丈夫として、其名も高き福島中佐、其面影を寫し繪ならで、筆に仕組める新趣向、千辛萬苦の功勳を、アルダイ山より猶高く、エニセイ河より彌長く、小説界に留めんものと、作者の起せる冒險心、鳥拉にあらぬ兎の毛の、命かぎり根かぎり、此三伏の炎天に、絞出したる腐醬の、甘い辛いの鹽梅は、試した上の御評判をと。名馬の足掻に由縁ある、板元殿々堂の主人、鬣ならで鼻の下、鬚髯を捻りて斬く

明治廿六年七月十九日内務省許可

明治廿六年七月廿二日印刷發行

版權所有

定價金八錢

著作者 渡邊霞亭

編輯兼 大淵涉

發行者 大淵涉

印刷者 村瀬時

發行所 大阪心齋橋北詰八十六番邸

發行所 暇々堂

暇々堂

再 版

改正日本商法釋義

從三位勳三等 中井弘君題字
大阪地方裁判所 正岩重巖君序文
大阪控訴院判事 志方鍛君序文
法學士 正七位 成田元衛 明治法律學校 植田卯之吉 著

明治廿六年七月一日
日ヨリ實施商業登記簿
●會社法 ●手形法
●破産法 ●施行條
例合本
●破産法 ●施行條
●會社法 ●手形法
●破産法 ●施行條
●會社法 ●手形法
●破産法 ●施行條

理を解て明義を釋で淺恐く此書の右に出るものあら申購諸君にして疑義あるときは左の處に質疑して説明を得るの便法を附せり

辨護士 大阪北區樋上町五十一番邸 乾吉次郎法律事務所
大朝日新聞批評 商法の要部施行期近きに迫り隨て其講義註釋の出づる百を以て算ふべし然れ共或は疎に失
理を外にするもの多し此書は法學士と明治法律學校々友と英佛二流の合著にして著者は官民に經歷あるもの條意を注
し法義を釋し專門の文律には通解を施し加ふるに質問應答の勞を執て此書の功用を完たからしめんとす商業界の指南
を以て任する著者自信の如斯篤きは當世尤も得難き所なり有望の書といふべし
大毎日新聞批評 商法の規程となすに足らず成田植田の二君是れを盡ひ以て此書を著すはす釋義平易明瞭にして商賣人
を轉く治も庖丁の牛を割くが如く毫も苦心の跡を見ず加之購讀者にして此書に疑義ある時は說明を得るの便法を附
じあれば平常職務に熟練し居る商賣に取りては此上もなき重寶なる書冊なるべし
發行所 大阪心齋橋北詰八十六番邸 駿々堂 賣捌所 大阪各書林 ●神戶吉岡支店 ●船井 ●熊谷 ●

終